



# 香美町学校間スーパー連携チャレンジプラン

## 学力向上ステップアップ授業



### ◆本町の学校と児童数の現状

私たちのまち香美町【図1】には、小学校が10校と中学校が4校あります。【図2】【図3】は、香美町の小学校の児童数の推移を表しています。

14年前の平成14年度に1,449人いた小学生が、今年度（平成30年度）は784人になっています。これが、6年後の平成36年度には612人になると見込まれます。



【図1】

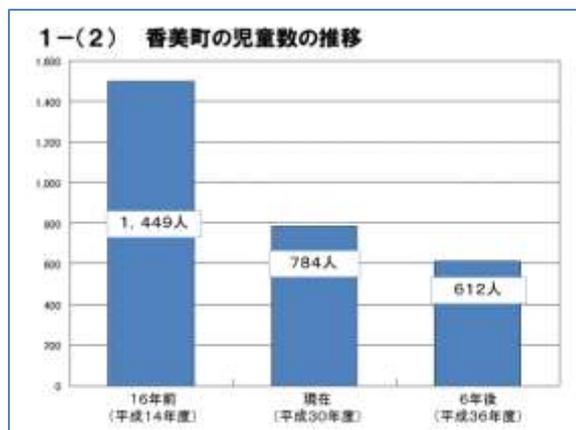


【図2】

【図4】は、平成30年5月1日の児童数を学年ごとに一覧にしたものです。

香美町内の全小学校10校中、香住小学校を除く9校は、すべて1学年1学級です。太枠で囲んだ学年が複式学級で、佐津小学校・余部小学校では、全学年が複式学級（2つ以上の学年の児童・生徒を1つに編制した学級）となっています。

全国的に少子化が進む中で、香美町においても過疎化、少子化が進行し、それにともない小学校の小規模化が、より一層進行しています。



【図3】

1-3) 平成30年度の小学校児童数(H30年5月1日時点)

学校名	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
奥佐津小	3	6	2	3	6	3	23
佐津小	5	2	3	9	3	3	25
柴山小	11	11	7	13	11	10	63
香住小	74	60	53	55	60	48	350
長井小	6	4	6	3	4	3	26
余部小	2	5	2	6	3	4	22
御崎分校	1	1					2
村岡小	11	9	19	11	12	19	81
瓦塚小	5	12	10	14	10	12	63
射添小	5	9	10	9	11	4	48
小代小	10	10	12	21	15	13	81

☐ = 複式学級

【図4】

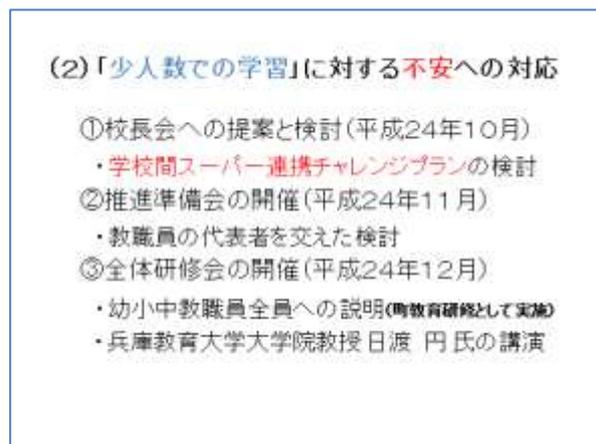
## ◆実施するまでの経過

香美町内の各学校では小規模校のよさを生かし、地域の特色のある小規模校ならではの教育を行っています。

平成24年6月に実施した「香美町教育環境アンケート」では、保護者や地域住民の各学校に対する信頼や関心や期待がとても高い一方で、小規模校では、多人数による教育や集団活動が制約されるため、多人数による多様な授業ができないのではないかと不安や、入学から卒業まで同じ人間関係が続くことにより、友だちの固定化や序列化などの不安、主体性・積極性や望ましい競争心の育成不足など、保護者や町民から見て、いくつかの不安材料があることがわかりました。【図5】【図6】



【図5】



【図6】

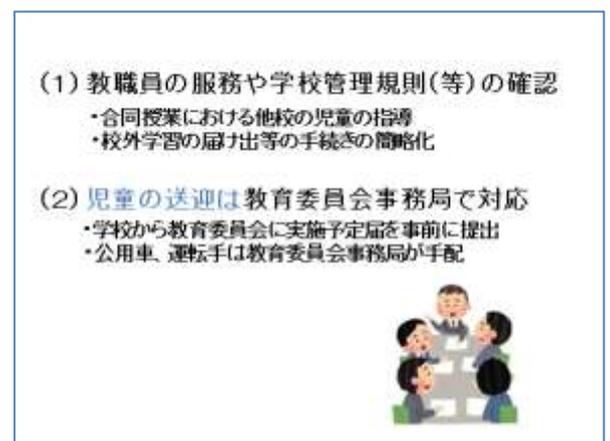
小規模校の長所を生かしながら、多人数での授業に取り組むにはどうすればいいか。

保護者や地域住民の、小規模校の少人数での学習に対する不安の解消と、子どもたちの確かな学力の定着をめざし、今までにない新しい発想、新しいチャレンジとして、小学校長会や推進準備会、町教育研修所などで協議を重ねて出したひとつの方策が、「香美町学校間スーパー連携チャレンジプラン・学力向上ステップアップ授業」です。

## ◆推進にあたっての条件整備

まず、教職員の服務や学校管理規則などについての確認を行いました。具体的には、合同授業実施に当たって、自校の教員が他校の児童の指導ができるかどうか、また、チャレンジプランで他校および校外等で授業を行う場合、その都度提出する校外学習の届出などの事務手続きを簡略化しました。

児童の送迎については、町教育委員会事務局が、各実施校から一か月前に提出される実施予定届に沿って、町マイクロバス、スクールバスや公用車、および運転手を手配していますが、町長部局のバス使用、除雪期間中のバス使用制限などにより、年度途中の大幅な計画変更が生じないように、送迎手段を調整しました。【図7】



【図7】

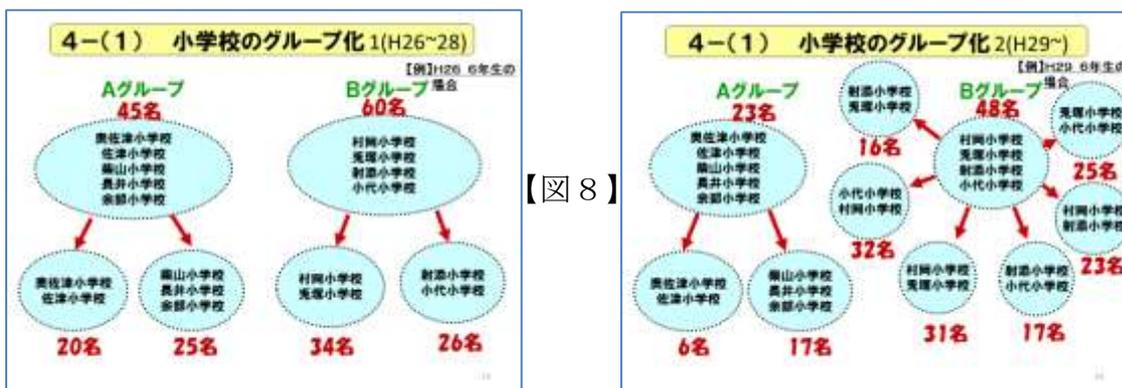
## 〈平成25年4月よりスタート〉

### ◆グループ編成について

町内の小規模校9校を、Aグループ〈奥佐津小、佐津小、柴山小、長井小、余部小〉、Bグループ〈村岡小、兎塚小、射添小、小代小〉の2つのグループに分け、各グループ内の同学年同士で多人数授業を実施しています。【図8】

通常時は近隣の小学校が連携して合同授業を行います。年に数回、Aグループ5校連合、Bグループ4校連合で行う合同授業や特別活動、さらに、5年生の自然学校（4泊5日）や、6年生の修学旅行（1泊2日）なども多様な合同学習の機会と捉え、効果的な連携を図っています。

【図9】は、プランの一例ですが、例えば3校が合同授業を行う場合は、A校の児童5人と教師1人、B校の児童10人と教師1人がスクールバスなどで移動して、C校に集まります。C校では児童10人と教師1人が、ワクワクしながら到着を待っています。



【図8】

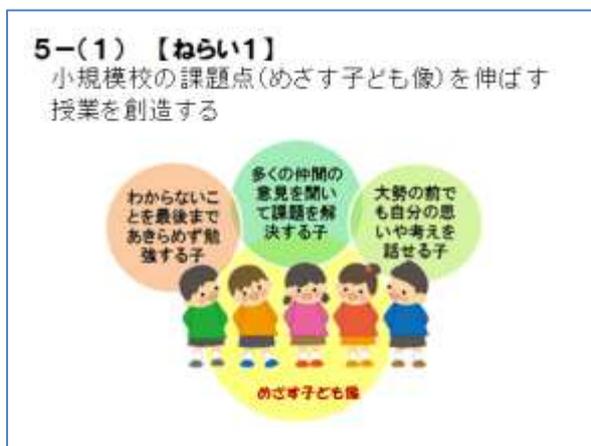


【図9】

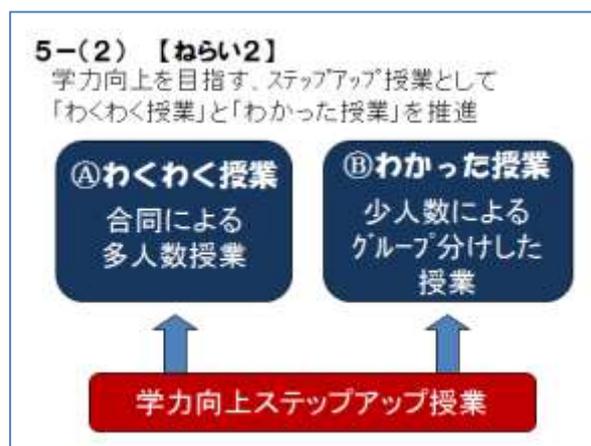
グループによっては、2学年をペアとして一日のうちで授業時間をずらして、合同授業を実施することにより多くの教師が関わる授業ができるような工夫をしています。複数の教員が1か所に集まり、一人一人の児童にきめ細かく関わることで「個に応じた指導」を重視し、学力アップの推進を図っています。

### ◆合同授業づくり

チャレンジプランでは、小規模小学校の課題である、人間関係の固定化・序列化や社会性の不足などを克服するため、「わからないことを見通しを持って粘り強く学習する」（主体的な学び）、「大勢の前でも自分の思いや考えを話し、仲間の意見を聞いて課題を解決できる」（対話的な学び）、「知識を相互に関連付けてより深く考える」（深い学び）などのめざす子ども像【図10】に沿った授業を展開しています。



【図 10】



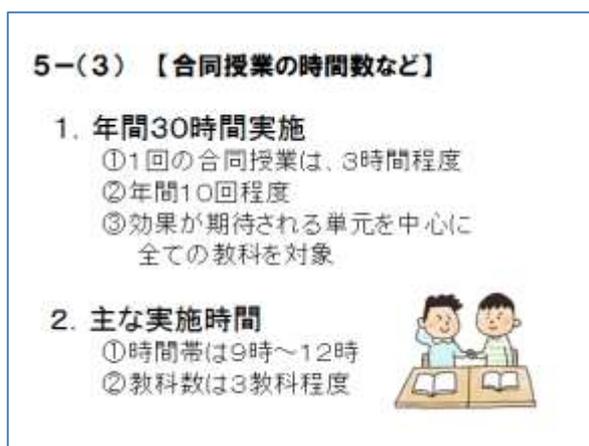
【図 11】

学力向上ステップアップ授業として、教科、内容によって最適な人数による2つの授業形態を計画し実践しています。【図 11】

ひとつは、子どもたちの学力の向上を目指し、合同による複数の教員で効果的なチーム・ティーチングの授業を推進する「わくわく授業」、もうひとつは、いわゆるハーフサイズによる授業やグループ別学習など、少人数に分かれた授業の場面の中で、個に応じた指導を展開し、教科等の基礎・基本や「学び方」などをしっかりと身に付けさせていく「わかった授業」です。

合同授業の時間数については、文部科学省で定める小学生の年間標準授業時間、850～980時間のうち、約30時間、10回程度実施しています。

教育効果が期待される単元を中心に、全ての教科を対象としており、主な実施時間帯は9時～12時、教科数は3教科程度です。【図 12】



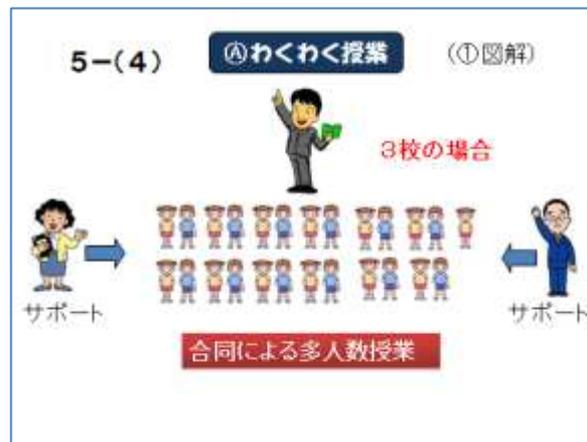
【図 12】



## ◆わくわく授業

「わくわく授業」は現状の児童数を大きく上回る多人数授業です。多人数での多様な形態や多様な意見による新たな学習効果が見込まれる「授業づくり」を、複数教師が協働性・専門性を生かして行います。

子どもたちが「わくわく」し、興味・関心を持って取り組むような「授業づくり」をめざします。【図 13】



【図 13】

【図 14】は「わくわく授業」の様子です。リレーやサッカー、合奏や合唱などを行ったり、多様な意見を引き出す討論形式の授業を行ったりし、少人数より多人数で行うことで、より高い学習効果が見込まれる教科、単元を実施しています。

体育科のゲームなどでは、「ゲームそのものに迫力があり、ゲームの本質に迫る学習ができる」、音楽では、「音量が増して、響きが豊かになる、さまざまなパートに分かれて合奏ができる」など、1校単独では困難だった授業の実施が可能になりました。

【図 15】は香住区内の5校、3・4年生の体育の授業の様子です。児童は、多くの友だちと力を合わせたり競い合ったりする楽しさを味わい、学習に対する興味・関心や意欲をますます高めています。



【図 14】



【図 15】

## ◆わかった授業

「わかった授業」は、きめ細かな指導ができる少人数にグループ分けした授業です。児童の学習到達度や関心度などに応じて分けたグループにより、学習効果が見込まれる少人数授業を行います。【図 16】

イメージとしては、つまづきを克服するために、ひとつずつ「わかった」と理解を積み上げられるような「授業づくり」をめざします。



【図 15】



【図 16】

一例として、算数の割り算や掛け算、分数などの単元で、個々の興味関心や学習到達度などによるグループ分けした少人数で学習します。【図 17】

少人数のグループで学習することにより、一人一人にしっかりと寄り添いながら、各教科の基礎基本の定着を図るなど、より個に応じた指導を行うことが可能です。

児童は「グループで話し合ったらいろいろな意見が聞けてよかった」など、普段とは違った学習形態で互いによい刺激を受け、意欲的に学習に取り組むことができます。

## ◆実施 1 年目の成果

まず、チャレンジプランをスタートした「1年目の成果」【図 18】として、児童は、連携校との合同授業で、お互いの学校同士でライバル意識が芽生え、望ましい競争心や対抗意識などが育つ一方、交友関係の広がりと共に、多くの友だちと交わる楽しさを味わい、コミュニケーション力が高まりました。

また、他校の児童と共に学習することで互いに良い刺激を受け、学習に関する意欲が高まるなど良い成果が出ています。

【1年目の成果】	
1. 児童	(1) 他校児童への驚きと自己変化 (2) 交友関係の広がり (3) 学習に関する意欲の高まり (4) 学習内容の広がり
2. 教師	(1) 意識の変化 (2) 授業改善への意欲 (3) 養護教諭、事務職員の協力
3. その他	(1) 情報発信により学校への信頼の高まり (2) 学校間、教育委員会との連携の強化

【図 18】

合同の授業を実施する複数の教師が、事前・事後に効果的な学習方法について十分に意見を交わすなどして教材研究が深められており、その結果、授業改善への意欲が湧いてくるなど、授業の質が高まってきました。

その他、学校・学級だよりやオープンスクールなどでチャレンジプランの様子を情報発信することにより、保護者や地域住民の学校への期待や関心、信頼がさらに高まっています。また、連携校への児童の送迎の配車を教育委員会事務局が行うなど、学校と教育委員会との連携も強化しました。

## ◆5年経過しての成果と課題

次に「5年経過しての成果」【図 19】として、当初は多くの児童が緊張感を伴いながら合同授業を受けていましたが、全体の場で進んで意見を言える児童が、かなり増えました。

また、多人数の場面でも発表できたことで自信が付き、相手の意見をしっかりと受け止めながら、自分の考えを発表できる主体的な児童も増えています。

班のみんなで協力しながら問題解決に取り組み、「わかる」楽しさを味わうと同時に、競争心が芽生え、話す力、聞く力が向上しました。

ほとんどの児童が毎月のチャレンジプランを心待ちにしており、回を重ねるごとに話し合い活動が活発になるなどの成果が現れています。

児童は、集まって学ぶことの楽しさだけでなく、香美町の仲間・友だちという絆が深まりました。この絆が、中学校進学に向け、いわゆる「中一ギャップ」の解消・軽減になると期待されています。

教師は、ティーム・ティーチング、グループ別学習、習熟度別指導、など、教科、単元によって多様な指導形態をとることができるため、より効果的な指導方法の確立が可能になっています。

また、経験年数の高い教師の言葉のかけ方や指示の出し方など他の教師の指導場面が見られるため、若手教員の指導技術が向上しました。

教師が複数で教材研究や指導準備を行うため、より効果的な「合同授業づくり」の工夫・改善が見られるなど、よい成果が現れています。

さらに、各学年で事前事後の協議を行うなど、指導技術の相互伝達がなされおり、教員同士が切磋琢磨する環境が整っています。児童だけでなく、教師自身の協働体制が構築されてきています。

その他、チャレンジプランを楽しみにしている児童の様子を家庭で聞くなどした保護者からの評価が高く、小規模校であっても地域コミュニティーの核として学校の存続を希望する声が多く、学校に対する信頼と支持がこれまで以上に高まっています。

**【5年経過しての成果】**

**1 児童**

- (1) 表現意欲の高まりと自信
- (2) コミュニケーション能力(話す力・聞く力)の向上
- (3) 人間関係を構築する力の向上
- (4) 毎月の交流授業への期待感(楽しみ)の高まり
- (5) 中学校進学に向けた不安の解消・軽減
- (6) 社会性の向上



**2 教師**

- (1) 効果的な指導方法の確立
- (2) 教師相互の連携による指導力の向上  
(チーム意識と互いの刺激)
- (3) 実践交流・研修会を通しての指導形態の工夫



**3 その他**

- (1) 保護者からの信頼と支持
- (2) 計画・実施・評価の流れの確立(効果的に実施)

【図 19】



一方、課題については、【図 20】教材研究、打合せ、事前準備にかかる時間と労力が大きく検討時間の確保が困難であること、学校行事や校外学習などがあり、複数校で日程調整が難しいこと、年間 1000 時間のうちの 30 時間をチャレンジプランとして実施していますが、残り 970 時間にどうつなげるか、通常の授業への波及効果、各グループ間での効果の検証がなされているが、全体としての評価ならびに成果の検証を行う必要があること、特別な支援・配慮等が必要な児童の理解と情報の共有化などがあります。

さらに、教職員の異動などにより、新しい教員が香美町に転入になっても、チャレンジプランの意義および方針、ねらい等をしっかりと捉えたうえで合同授業に取り組むよう、継承と再確認を行うことが大切であること、複式学級を有する学年の授業確保などの課題もあります。

合同授業を実施する教員同士が、事前、事後に効果的な学習方法について十分に意見を交わし、評価、並びに成果や課題を共有しながら、教育関係者一丸となって取り組んでいます。

【課題】	
1	事前準備、教材の選択と検討時間確保
2	複数校での日程調整が困難
3	専科授業等、通常授業への影響
4	評価ならびに成果の検証
5	特別な支援・配慮等が必要な児童の理解と情報の共有化
6	チャレンジプランの意義・方針の継承と再確認(教職員の異動・世代交代)
7	複式学級を有する学年の授業確保等

保護者を対象に行ったアンケート【図 21】では、「意義のある取組だと思う」と高く評価し、回数を増やしてほしい、内容の充実を図ってほしい、現状を維持してほしいなど、チャレンジプランの継続を希望する肯定的な回答が、72.2%ありました。

チャレンジプランに期待することとして、新しい友だちとの出会いや仲間づくり、さまざまな考え方に触れる、大勢の前ではっきり話せることなどがありました。子どもが毎月のチャレンジプランを楽しみにしているかどうか聞いたところ、「楽しみにしている」「どちらか」というと楽しみにしている」との回答が、74.9%ありました。

チャレンジプランの様子を家庭でもよく話してくれる、いつもと違う友だちと一緒に学習すると楽しいようだ、中学入学までに友だち同士



で慣れることができているなどさまざまな意見をいただきました。

【保護者の感想】(アンケート結果)	
1.	意義のある取組だと思う(回数を増やしてほしい、内容の充実を図ってほしい、現状を継続してほしい)が72.2%
2.	期待することとして 「新しい友だちとの出会いや仲間づくり」(保護者74.5%、町民65.1%) 「さまざまな考え方に触れる」(保護者54.1%、町民55.2%) 「大勢の前ではっきり話せること」(保護者40.6%、町民39.7%)
3.	子どもがチャレンジプランを楽しみにしていると感じている保護者が74.9% (「楽しみにしている」44.4% 「どちらかといえば楽しみにしている」30.5%)

【図 21】

学校間スーパー連携チャレンジプラン・学力向上ステップアップ授業は、平成30年度で、実施6年目になりました。そこには、少人数では味わえない雰囲気、他校の児童の異なる意見や感想に刺激を受け、合同学習に目を輝かせながら意欲的に取り組む子どもたちの姿があります。



【わくわく授業の一例】



【わかった授業の一例】

さらに、教職員は、小規模校ならではの教育環境を生かしそれぞれの校区で特色を出しながら、生きる力の基となる「確かな学力」を育てるため、一人一人にしっかりと寄り添い、課題を共有し改善に向けて意見を交わし、今後のさらなる授業内容の充実を図るなど、熱意を持って取り組んでいます。



学校を信頼し、チャレンジプランの取組を高く評価する保護者や地域住民の期待の声に、多くの教育関係者が学校間スーパー連携チャレンジプランの意義を感じています。

【めざす子ども像の実現】

